



伝えよう
鮭
文化

学ぼう
青
砥武平治

育てよう
鮭
つ子

青砥武平治生誕300年祭 開催

関連事業は子どもたちの学びの場に

青砥武平治生誕300年祭（以下、「300年祭」）本番を前に、関連事業がイヨボヤ会館や市内小学校などで実施されました。イヨボヤ会館では、8月10日から「青砥武平治特別展」を開催。青砥武平治に関する古文書や武平治直筆の文書などを展示しました。

また、11月6日から保育園児のぬり絵や小学生の絵画、鮭のぼりが展示され、300年祭を盛り上げました。

また、青砥武平治や鮭に関する授業を希望のあった3つの小学校（村上小学校・猿沢小学校、さんぼく北小学校）で実施。青砥武平治に扮してイヨボヤ会館の奥村館長から、青砥武平治と種川、鮭について学びました。子どもたちは普段から鮭について学

● 問い合わせ

農林水産課水産振興係
☎ 53・2111（内線341・342）

んでいる様子で、子どもたちの知識の多さに、奥村館長も驚いていました。



▲8月から開催した青砥武平治特別展



▲青砥武平治に扮して種川や鮭などについての授業を行うイヨボヤ会館の奥村館長

村上の鮭文化を じっくり堪能

11月9日(土)、3000年祭の初日は、教育情報センターを会場に基調講演とパネルディスカッション、小中学生による鮭に関する活動発表などが行われ、子どもから大人まで約200人が来場しました。

また、基調講演などに先立って、村上木彫堆朱で制作した鮭の衝立の除幕式が行われました。題材になった鮭の絵は、県内出身のまんが家によるもので、現在は、イコボヤ会館内に展示してあります。

青砥武平治と種川に学ぶ

村上小学校と山辺里小学校、村上東中学校の3校が、学校で取り組んでいる鮭に関する活動を発表しました。

村上小学校の児童は「約束」という歌の合唱やリコーダーの演奏を、山辺里小学校の児童代表と村上東中学校の生徒代表はパネルを使って取り組みの成果をそれぞれ発表しました。



山辺里小学校の児童代表の発表



村上小学校の児童たちの合唱



村上東中学校の生徒代表の発表

基調講演

近世日本史を専門とし、江戸時代の漁業・漁村史の研究を行っている東京農工大学の高橋美貴准教授を招いて種川制度の登場と拡がりー江戸時代のサケ資源保全ーという演題で講演していただきました。

高橋准教授は、研究の中で村上の種川制度について取り上げており、武平治の種川制度が山形県や宮城県などでも取り入れられていたことなどを、収集した資料をもとに分かりやすく話していただきました。



▲種川制度について語る高橋准教授

パネルディスカッション

コーディネーターを地元民俗学・考古学者の赤羽正春氏が務め、5人のパネリスト(下の写真を参照により行われました)。

5人のパネリストは、民俗学的見地から鮭の文化や鮭料理について話す赤羽氏の進行に合わせ、それぞれの観点から村上の鮭文化について話しました。

永田氏は、世界の鮭の総生産量のうち4分の1が天然もので、残り4分の3が養殖であるということ、山貝氏は、塩引き鮭が昔から皇族に好まれていたこと、佐藤氏は、種川を鮭が自然化できるような川にし、伝統ある鮭漁を守っていききたいということ、本間氏は、青砥武平治がいかにして鮭資源の保護に取り組んだかという視点から、武平治の職歴と能力について話していただきました。非常に貴重な話を聞くことができたパネルディスカッションとなりました。



▲貴重な話を聞くことができたパネルディスカッション



赤羽正春氏
民俗学・考古学者



青砥哲平氏
青砥武平治の子孫



山貝勉氏
村上市料理業
組合組合長



佐藤健吉氏
三面川鮭産漁業
協同組合組合長



本間哲朗氏
村上歴史研究会
会員



永田政義氏
村上鮭加工業
組合会長

目でも楽しめた鮭料理

午後6時から、市内の料亭・割烹で「鮭料理を楽しむ会」が行われました。

協力をいただいた市内6つの料亭・割烹では、それぞれに約20人が参加し、鮭料理に舌鼓を打ちました。

市内の女性は、「とてもおいしい。味だけではなく、器や料理の盛り付けなど、見た目の美しさも楽しむことができてうれしいです。」と話していました。
味のみならず、目でも楽しませてくれる極上の鮭料理を堪能できたひとときとなったようです。



▲鮭料理を目でも舌でも楽しみました

2日(11月10日)

雨風にも負けず

11月10日(日)は、イヨボヤ会館とその周辺を会場に、時折強い雨が降る悪天候の中で「イヨボヤ祭」を開催。スタッフは、雨具着用で業務に奔走し、びしょ濡れになりながらもおもてなしの心で訪れた人に接していました。
特設ステージでは、開会セレモニーの後、踊りや太鼓、獅子舞などが披露されました。

イヨボヤ会館前の広場では物産販売や鮭の重さあてクイズ、塩引き・はらこくしりの実演などが行われ、人だかりがで、感心しながら見物していました。
この日が道場開きとなった塩引き道場には、多くの若者が参



▲大勢の人が集まった実演コーナー

加し、和気あいあいとした雰囲気の中で塩引き鮭作りに挑戦しました。
イヨボヤ会館に隣接する鮭公園内の池では鮭のつかみどりが行われ、参加者は合図と同時に勢いよく池の中に入り、ずぶ濡れになりながら鮭を追いかけました。子どもたちは、重い鮭を持って上がるのに苦労していたようでした。



▲楽しそうに作業を進める塩引き道場参加者



▲力強く太鼓演奏をする三面小学校の児童たち



▲水槽内の鮭を見ながら「う～ん、重さはどれくらいかな？」



▲悪天候の中にもかかわらず、多くの人が来場しました



▲楽しい話で和やかにしてくれた「さかなクン」

大人気！さかなクンのトークショー

朝から始まったイヨボヤ祭もお昼前になると、ステージ前に設置された大きなテントを埋め尽くすほどの人でいっぱい。お目当ては、東京海洋大学客員准教授でもある「さかなクン」。

トークショーの主演、さかなクンが登場すると訪れた人たちは大喜び。大きな声援と拍手で迎えられるとさかなクンもびっくりしたようでした。

得意のイラストを描きながらトークをするさかなクン。訪れた人たちは、さかなクンの楽しい鮭の話聞きながらも、目は生き生きとしたイラストに向けられ、会場では「すごいな」と感

心する声も聞かれました。明るく、誰にでも分かりやすく話すさかなクンのトークに、会場は寒さを忘れるほどの熱気に包まれていました。



▲雨の中でもさかなクンのトークショーにはこんなにも大勢の人が…

印象に残る一大イベント

イヨボヤ祭の最後には、鮭の重さあてクイズの発表がありました。これは水槽の中の鮭を見て、重さをあてるというもので、正解の重さに一番近い回答をした人には、その鮭をプレゼント。クイズの当選者は、自分の名前が発表されると、一瞬びっくりしていましたが、鮭を受け取ると「うれしいです。」と笑顔を浮かべていました。

午後3時、2日間に渡って開催された300年祭は、無事に閉会しました。

この青砥武平治300年祭は、訪れた大勢の人たちにとってはもちろん、スタッフにとってもとても印象に残るイベントになりました。



▲重さあてクイズで当選。武平治祭の奥村館長から鮭を受け取りました

INインタビュー

あおとてつへい
青砥哲平 さん



1948(昭和23)年 村上市生まれ
新潟県立村上桜ヶ丘高等学校卒業後、上京し、中央工学校機械設計課卒業。
現在、(株)ディック電子取締役執行役員常務兼電気事業部統括本部長
青砥武平治の子孫

「はじめにこの青砥武平治生誕300年祭の話聞いたときはこれほど大々的になるとは思っていなかった。」とびっくりした様子で話してくれた青砥さん。故郷村上市を愛する思いが強く、パネルディスカッションでパネリストとして参加されたのもそういう思いからだと言います。

青砥さんは、「屏風まつりや竹灯籠まつりなどの村上らしい、こだわりを持ったまちおこしを継続していくことが大切なのではないでしょうか。」と村上市の将来についても語ってくれました。

最後に「村上市のことなら何でもやりたいと思っています。」と、力強く話してくれました。

みんなの協力と連携の賜物

この300年祭の開催に向けて、市では三面川鮭産漁協や村上商工会議所、村上市観光協会などの関係団体および新潟県と連携して「青砥武平治生誕300年祭実行委員会(会長 大滝市長)」を組織して、準備を進めてきました。

中でも、実務者の皆さんは、事業の内容などについて何度も話し合いを重ね、本番を迎えました。これら関係者の皆さんの連携と協力が300年祭の成功につながったようです。